

「アルベルチーナのアイスクリーム」再考
—プルースト『囚われの女』における取り入れの空想—

高柳 和美

要旨

Cet article porte sur les paroles que prononce Albertine à propos des glaces dans *La Prisonnière* de Marcel Proust. De nombreux chercheurs considèrent ces paroles comme un pastiche de celles du protagoniste-narrateur, donc comme un essai d'*auto-pastiche* par Proust lui-même. Nous cherchons pour notre part à montrer qu'il s'agit moins d'un simple pastiche du narrateur que d'une marque de l'épanouissement intellectuel d'Albertine, qui se développe dans *La Prisonnière* entière, quoique sous l'influence du narrateur. Nous examinons d'abord de ce point de vue la réaction ambiguë du narrateur devant ces paroles, à savoir son pressentiment de la séparation et son attendrissement. Nous analysons ensuite les comparaisons formulées dans le texte entre les glaces et les monuments ou les montagnes. La métaphore des « glaces prises dans les moules d'architecture » peut s'interpréter comme un symbole du goût et de l'intelligence du narrateur. Les paroles d'Albertine, qui disent le plaisir de manger ses glaces, donnent ainsi à voir à la fois le processus même par lequel elle assimile le goût et l'intelligence qui constituent justement les qualités du narrateur, et l'effet de cette assimilation.

キーワード：マルセル・プルースト, 『失われた時を求めて』, 『囚われの女』, 精神分析, 取り入れ (introjection)

1. はじめに

マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』(1913-1927)の第五篇『囚われの女』には、主人公の恋人であるアルベルチーナが、巧みな表現を用いてアイスクリームを称える場面が存在する。主人公のアパルトマンに同居しているアルベルチーナは、ある朝、彼の部屋から通りの物売りの声を聞く。魚や野菜など様々な食べ物の名が呼ばれるのを耳にして次々に食欲をそそられた彼女は、やがて通りでは売られておらず物売りが名を呼ぶこともない、季節外れのアイスクリームを食べてみたいと主人公に訴える。なぜアイスクリームが食べたいのかと主人公に問われると、アルベルチーナは書き言葉的な比喻を連ねた詩情豊かな表現を用いて、例えば以下のように答える。

アイスクリームについていえば、[…] 寺院、教会、記念碑、岩山、そういったものを食べるときはいつでも、私がまず見るのは絵入り地図のようなもので、それから私はそのフランボワーズやヴァニラの建築物を、私の喉の中で冷たさに変えてしまうの。[…] リッツではフランボワーズの記念碑も作っていて、[…] 私はその薔薇色の花崗岩を喉の奥で溶かすでしょう。¹

このアルベルチーナによるアイスクリーム礼賛は3ページにも満たない短いテキストだが、これまで多くの先行研究の中で論じられてきた。

まずアルベルチーナが話す内容に関していえば、アイスクリームを食べる快樂に性的な意味を読む解釈が多く見られる²。また、アルベルチーナの使う表現がいかにもプルースト的な隠喩に満ちていること、それが語り手の影響を深く受けた結果だとされていることから、この華やかな表現はアルベルチーナによる語り手(=作家)の模倣であり、アルベルチーナの言葉はそもそもプルーストが書いたものである以上、このテキストは作家による自己パスティッシュであるという読解がなされている³。

本稿では、まず先行研究における自己パスティッシュという解釈の妥当性について検討する。『囚われの女』全体を貫くアルベルチーナの知的成長というコンテキストの中にアイスクリームのテキストを位置づけることにより、自己パスティッシュという解釈とは別の説明を試みたい。次に、この観点からアルベルチーナの言葉に対する語り手の反応を考察する。最後にアルベルチーナの話し言葉を分析し、アイスクリームを食べるという空想が実際のところ何を意味するのかを読み解く。この一連の考察を通じてわれわれは『失われた時』に描かれている心的世界の一端を、とりわけ精神分析との関わりにおいて明らかにすることを目指す。

2. 模倣、影響、コンテキスト

まず、アルベルチーナが語るアイスクリームの話し言葉の主体について検討してみよう。上述したように、多くの論者はアイスクリームのテキストをアルベルチーナによる語り手の模倣ととらえ、アルベルチーナがプルーストの創作した人物であること、そして語り手が作家自身とみなしうることから、このテキストがプルーストによる自分自身のパスティッシュなのだと主張している。

その時彼女は私に次のような言葉で答えたのだが、この言葉はバルベック以来、彼女のなかでどれほどの知性と隠れた趣味が急激に発達したかを私に示したのであり、彼女はこの種の言葉がひたすら私の影響のお陰である、常に私と一緒に暮らしていることのお陰であると主張した、しかし私ならばこうした言葉を決して言わな

かったであろう、あたかも見知らぬ誰かから会話の中で文学的な形式を決して使っ
てはならないと禁止されていたかのように。[...] 私はそれでもやはり深く感動した、
というのもこう考えたからだ。「確かに私は彼女のように話さないだろう、だがそ
れでもやはり、私がいなければ彼女はこんなふうには話さないだろう、彼女は私の影
響を深く受けている、だから彼女は私を愛さずにはいられないのだ、彼女は私の作
品だ (elle est mon œuvre)」⁴

アルベルチーナ自身の言によると、彼女の言葉はひたすら主人公の「影響」を受けた結果である。他方、語り手は「自分はこうした言葉を言わない」「彼女のように話さない」と、自分の彼女への影響というアルベルチーナの主張を話し言葉という面において一旦は留保するのだが、いずれにせよ彼女への自分の「影響」については認めている。

この引用部分を読む限り、多くの先行研究が定説としている「アルベルチーナが語り手を模倣した」という解釈の妥当性は疑わしい。なぜなら、語り手は「自分は彼女のように話さない」と言い、彼のアルベルチーナへの影響が話し言葉を介したものではないことを明言しているからだ。また、語り手が雑誌「フィガロ」に投稿した論考が掲載されるのはアルベルチーナの死後である以上⁵、『囚われの女』の時点でアルベルチーナが語り手の書いたもの、少なくとも公的に発表された文章を読んだということはある。したがって、アルベルチーナは語り手の話し言葉（普段の話し言葉ではなく、アルベルチーナが使ったような書き言葉的な話し言葉）も、語り手の書き言葉も、いずれも模倣することは不可能である。そもそも上の引用文中で使用されているのは「影響」(influence) という語だけであり、「模倣」(imitation) やそれに類する語は全く使用されていないのである。

この問題について先行研究がどのように論じているかを確認してみよう。

ハロルド・マーチとジャン＝ピエール・リシャルはアイスクリームのテキストをプルーストの自己パロディとみなしており、フィリップ・ルジュンヌは「彼女は私の作品だ」という語り手の言葉を根拠として「アルベルチーナのテキストはプルーストの作品である」と述べているが、彼らはこの見解にそれほど多くの説明を費やしているわけではない。

ジェラルド・ジュネットは『パランプセスト』という著作の中で自己パスティッシュ (autopastiche) に短い一章を割り、アルベルチーナのアイスクリームについての言説をその最たる例として挙げている。プルーストはこのテキストを「語り手の文体がアルベルチーナの文体に影響を与えた例として提示して」いて、「アルベルチーナは少しずつ [...] 恋人の言葉の癖を身につけてしまった」⁶のだとジュネットは述べている。

エミリー・イールズは、アルベルチーナの話し方は語り手の話し方の模倣であり、アルベルチーナの話し言葉の中には語り手の書き言葉の文体が先取りされていると考える。

だが語り手自身は、自分のアルベルチーナへの影響を認めつつも、自分が彼女のように決して話さないと断言し、しかもアイスクリーム礼賛の言葉が発せられた時点では語り手はまだ『失われた時』を書いていない。したがって、アルベルチーナは語り手の話し言葉を聞いたことも読んだこともないということになり、アルベルチーナによる語り手の文体の模倣は、物語内容のリアリズムという観点からは不可能ということになる⁷。以上のことからイールズはこのテキストに「話されたテキスト＝フィクションとしてのテキスト＝語り」と、「書かれたテキスト＝メタテキスト＝プルースト自身による批評」という二つの水準があるとみなし、こう結論する。「このテキストは、ある時は批評の側面を示し、ある時は語りの側面を見せる、まさにメビウスの輪である⁸。」

ジャン・ミイはイールズの解釈を補足しながら、イールズが「不可能」と考えたアルベルチーナによる語り手の模倣を「変換の法則」(la loi de transformation) という観点から正当化している。つまり、語り手がかつてベルゴットの話し言葉の中にベルゴットの書かれた文体を認めたように、アルベルチーナは語り手の文章を何も読まずに、話し言葉と書き言葉を結ぶ変換の法則を使って、語り手のディスクールから語り手の未来の文体を引き出すことができたというのだ。この法則を使えば、アルベルチーナによる語り手の模倣は、イールズが懸念したように不可能ではなくなる⁹。

いずれの論者も模倣という行為を自明のものとして扱っている。だが先に述べたように、アイスクリームのテキストには「模倣」という語の記述はなく、模倣の可能性も語り手自身により打ち消されている。イールズ、ミイは「彼女は私の作品だ」という表現を字義通りに取ってプルーストによる自己パスティッシュと考えている。だが、この表現は単に「私」が彼女に影響を与えたことを強調するメタファーではないだろうか。この表現を「彼女は私(＝作家)の作品だ」と受け取ることは、そもそも語り手の「私」と作家との同一視を前提としている。だが作家が語り手に固有名、とりわけ作家と同じマルセルという名を与えないよう極力配慮していたことはよく知られている¹⁰。

セルジュ・ゴーベールはアルベルチーナの言葉を「単なるプルーストの自分自身によるパスティッシュではない¹¹」と述べているが、われわれも彼女自身がアイスクリームの語りの主体だと考える。そして、それは単にテキストに書かれている通り、アルベルチーナが語り手から受けた影響の結果なのである。

しかし「影響」とは正確にどのようなものだろうか。このことを考えるために、問題のテキストのコンテキストを特定する必要がある。アイスクリームのテキストはこれまで、このテキストの直前に位置する「パリの物売りの声」¹²や、『失われた時』に描かれるこれ以外のパスティッシュ(『花咲く乙女たちの陰に』におけるジゼールの答案、『見出された時』におけるゴンクールの未発表日記)¹³との関連で論じられてきた。しかし本稿でわれわれは、アルベルチーナの言葉が「バルベック以来、彼女のなかでどれほどの知性と隠れた趣味が急激に発達したか」を語り手に示すものであったことに注目した

い。というのも、アルベルチーナの知的・感性的成長については、以下に述べるように『囚われの女』のなかで一貫して言及されているからである。

『囚われの女』前半部で既に、語り手はアルベルチーナが驚くほど頭が良くなっていることに気づく¹⁴。呼び鈴を鳴らすまで自分の部屋に入ることを許さない語り手を、アルベルチーナはラシーヌの悲劇『エステル』に登場するアハシュエロス王になぞらえて詩句を引用するのだが、これは語り手の家族の引用癖を身につけた結果である¹⁵。主人公の家に住むうちに彼女は沢山本を読むようになり、彼と二人きりのときは朗読をすることもある¹⁶。二人の間でトロカデロ宮殿が話題に上ると、アルベルチーナはそれがダヴィウーの作であることを直ちに指摘し、知識の上では時に語り手を凌ぐことが示されている¹⁷。彼女はまた、語り手の本棚にあるドストエフスキーを占有してしまい、彼の文学談義の聞き役を務めるようにもなっており¹⁸、主人公の愛読書であるベルゴットの本も好んで読んでいたようである¹⁹。服飾や芸術に関していえば、アルベルチーナの生来の趣味の良さはエルスチールとの会話でさらに洗練されており、ゲルマント公爵夫人よりもずっと多くの服飾の知識を蓄えている²⁰。家にいる時はデッサンや彫金の仕事をしており²¹、服飾と室内装飾に加えて銀器にも興味をもち、銀細工についての著作を読み、蒐集も始めている²²。語り手が「現実の成長」(enrichissement réel)「自律的な進歩」(progrès autonome)²³と呼ぶこのアルベルチーナの成長は、やがて『消え去ったアルベルチーナ』において、アルベルチーナが語り手宛の手紙の中で用いる「二重に黄昏れていた散歩」(promenade deux foi crépusculaire)²⁴という表現に結実することになるだろう(この表現はアルベルチーナのモデルであるプルーストの秘書アゴスチネリがプルースト宛の手紙の中で実際に使ったと考えられており²⁵、この箇所では自己パスティッシュというメタフィクションの要素は見られないことに注意したい²⁶)

以上の文脈を踏まえると、アイスクリームを称える彼女の言葉は、知的成長の途上にある彼女が自ら発したものであることが理解される。アルベルチーナの読書については再三言及されている。アルベルチーナはとりわけ語り手の本を読むことによって、このような話し方を身につけたのではないだろうか。『失われた時』において書き言葉のような話し方をするのはアルベルチーナだけではない。この小説の登場人物は各々特徴的な話し言葉を持っている。なかでも文学者たちの言葉遣い、ルグランダン詩的な、ブロックの大仰な、ブリショの術学的で学者風の話し言葉は、彼らが読む本の種類を反映していないだろうか。アルベルチーナも彼らのように読書を通じて書かれた言葉を取り入れ、書き言葉的な話し方をしたと考えられるのである。とはいえ、語り手がアルベルチーナに与えた「影響」とは単に彼女に書物を提供したことのみを指すのではない。アルベルチーナは自ら語り手の本を読んだのだが、彼の存在こそが彼女の読書を動機づけたのである。彼女が知性と趣味を発達させたのは、語り手の知性と趣味に憧れ、自分の中に取り込んだ結果なのである。

最後にこのテキストの成立過程についても触れておこう。ナタリー・モーリアック＝ダイアーによると、主人公の初めての公的文学活動である「フィガロの記事」とアイスクリームのテキストは同じ年（1922年）に書かれたものである²⁷。主人公の投稿した文章が雑誌「フィガロ」に掲載されるという出来事は『消え去ったアルベルチーナ』で起こり、記事に対する社交界の反応は『見出された時』に描かれているが、肝心の記事の内容自体は小説の中に書かれていない。山崎俊明は記事の内容について以下のように考察している。フィガロの記事へのゲルマント公爵の感想「シャトーブリアンの流行遅れの散文に見られるような誇張と隠喩」に山崎は注目し、プルーストが1921年にサント＝ブーヴの著作を取り寄せていたこと、その著作に引用されているシャトーブリアンの表現（木々の幹を「赤い花崗岩の柱」に例える）に類似した表現が『見出された時』の「ゴンクール未発表日記」（トロカデロの塔を「塔の形をした菓子」に例える）とアイスクリームの文章（アイスクリームを薔薇色の花崗岩に例える）、それにゴンクール自身の文章（『日記』の中の「夕焼けに染まるオペリスク」「薔薇色のシャンパーニュ・シャーベット」という表現）にも見られることから、次のような仮説を立てている。フィガロ掲載記事とは『見出された時』のゴンクール未発表日記のことであり、アイスクリームの言葉に対する語り手の感想の中にある「もっと神聖な他の用法」とは、フィガロ掲載記事＝ゴンクール未発表日記を指すという仮説である²⁸。この説を考慮に入れると、アルベルチーナの言葉が語り手の模倣か否かという問題に関して、二つの異なる可能性が考えられる。アルベルチーナが語り手の書いたフィガロ掲載前の記事を読み、その表現を話し言葉の中で借用したという可能性、あるいは、アルベルチーナが語り手の文章ではなくシャトーブリアンあるいはゴンクールの著作を読み、彼らの表現を参考にして話したという可能性である。決定稿のテキストにおける記述は曖昧であり、いずれの可能性がより正しいとはいえない。しかし本稿では上述したアルベルチーナの自律的進歩という文脈を重視して、やはり後者の可能性を採りたい。

3. 語り手の両義的な反応

次に、アルベルチーナの言葉に対する語り手の反応という面から問題のテキストを検討してみよう。

アルベルチーナがアイスクリームを買いに行きたいといった店がヴェルデュラン家行きつけの菓子店ルバツテであることや、アイスクリーム礼賛の途中でアルベルチーナがあげる官能的な笑い声、最後に付け加えられたヴァントウイユ嬢との思い出に対し、語り手は嫉妬の苦しみを感じる。だが、語り手の嫉妬はアルベルチーナとの愛全体にまたがるものであり、嫉妬は『失われた時』全体を貫くテーマであって、とりわけこのテキストに特徴的なものではない。この一節においてむしろ注目したいのは、語り手が抱いたアルベルチーナとの別れの予感と、自分が彼女に影響力を持っていることへの感動と

いう二つの相反する感情である。

おそらくアルベルチーナと私の未来は同じではないかもしれない (Peut-être l'avenir ne devait-il pas être le même pour Albertine et pour moi)。喋りながら彼女がそんなにも文語的な比喩、私がまだ知らないもっと神聖な他の用法のために (pour un autre usage plus sacré et que j'ignorais encore) 取っておかれるべきだと思われた比喩を息せき切って使うのを見ながら、私はほとんどそんな予感を抱いた (J'en eus presque le pressentiment) ²⁹。

この別れの予感について、アルベルチーナが語り手を模倣しながら彼の文体を馬鹿にしたこと、文学的な表現を会話で使うことで文学の言語を冒涇したことに語り手が感受性を傷つけられ、文学に対する考え方に関して二人の間に大きな溝があることを認めたためとイールズは解釈している³⁰。しかし前節でも述べたように、語り手に自分が模倣されているという考えがあることを示す文章は、問題のテキストには見当たらない。また「もっと神聖な (plus sacré) 他の用法」という語り手の表現から直ちにアルベルチーナの言葉を冒涇的 (blasphématoire) とみなすことには幾らかの飛躍がないだろうか。

ミイは、アルベルチーナの言葉がヴェルデュラン家訪問を妨げられた彼女の主人公への復讐とみなしている。アルベルチーナが想像する寺院や教会、記念碑、エルスチールの山などを含むアイスクリームの絵入り地図は『失われた時』という作品そのものを象徴しており、彼女はこれを飲み込むことで語り手の未来の作品を破壊する。ゆえに語り手が彼女との別れを感じたのは自分の天職に対する攻撃を感じたからだともミイは説明している³¹。確かに、アイスクリームの飲み込みを語るアルベルチーナの言葉に、ある種の攻撃性が感じられることは事実である。だがこの攻撃性は語り手への怒りによるものというよりも、アイスクリームに対する欲望の激しさに付随するものではないだろうか。アイスクリームの建築物が破壊されるのは、後述するように、それを自分の中へ取り込むためであり、アイスクリームは単に怒りにまかせて破壊されるわけではなく、むしろ激しく欲望されていると考えられるのである。

ではなぜ語り手は別れの予感を抱いたのだろうか。本稿では、「未来が同じではない」という表現に注目したい。『囚われの女』には、他にも「二人の未来」について言及されている箇所が存在する。

私はアルベルチーナに対して深く感謝した、彼女はレアの女の友人に会いにトロカデロへ行ったのではなく、私の合図一つでマチネを後にして家に帰ってくことで、未来にわたってさえ (même pour l'avenir)、私が思っていたよりずっと彼女が私に属していること (elle m'appartenait) を示したのだった³²。

家族のような感情と家庭的な幸福感によって心に穏やかさが生まれていたが、その穏やかさは、未来を見越していて (Anticipant sur l'avenir)、私の恋人の従順さ (docilité)のおかげで私はほとんどその未来をコントロールできると感じるほどであり、すぐそばにいて煩わしく、逃れられない彼女の存在によって満たされ安定し、より強くなっていた³³。

主人公が恋人と未来を共有していると感じるのは、彼女が従順であり、自分の支配下にあると感じられる時である。もしそうであるならば、二人の未来が同じではなくなるという語り手の予感、彼女が自分に従属しておらず、自立しつつあると感じたということの意味していると考えられるのである。実際、前節で確認したように、アイスクリームの言葉はアルベルチーナの自律的な成長という文脈の上に位置づけられる。また語り手は、たとえ彼女と近づきになるための口実とはいえ、バルベックで彼女に次のように言っていた。「私は確信しています、私の友情はあなたにとって貴重なものであり、私はまさにあなたに欠けているものをあなたに与えることのできる人間であると³⁴。」知性や趣味は主人公にあって彼女に欠けていたものであり、金銭や結婚の可能性と同様、主人公が彼女に力を及ぼすことができると思われた大事な手段の一つである。したがって、アルベルチーナが知的になることはそれだけで語り手の力が弱まることであり、彼に別れの予感を抱かせるに十分なのである。

以上のように、主人公が抱いた別れの予感は、アルベルチーナの侮辱や怒りによるものではなく、むしろアルベルチーナの知的成長への反応として理解される。しかしこのことは彼が覚えた感動とは矛盾しない。なぜならアルベルチーナの知的発達、語り手の影響を受けながら自律的でもあるという二面性を持つからであり、このことが一方では別れの予感を起こさせ、他方では感動を引き起こすこととなったのである。

これ以外の語り手の反応も検討しておこう。アルベルチーナが最初に話を中断した時、語り手は次のような感想を抱く。

私は少しくまき言い過ぎではないか (c'était un peu trop bien dit) と思ったのだが、彼女はうまき言った (c'était bien dit) と私が思ったことを感じて後を続けた [...] ³⁵

「うまき言い過ぎ」という語り手の評価は、確かにジュネットが指摘するように「本のように話しすぎる」という語り手の祖母のルグランダンについての批判的感想とも通じるもので³⁶、「話し言葉は自然なものであったほうがよい」という見方を含んでいるかもしれない。だが、「うまき言い過ぎ」と思う語り手と「うまき言ったと思われた」と感じるアルベルチーナの間に生じている齟齬にも注目すべきだろう。上で述べたように、語

り手にとってアルベルチーナとの関係を維持するためには彼女を何らかの力によって支配している（少なくともそう感じる）必要があり、知性や教養は力の一つである。他方、アルベルチーナは、ヴァントゥイユ嬢と知り合いであるという嘘をつき、後になってその嘘を撤回するのだが、それは語り手に音楽的教養があると思わせて語り手と親しくなりたいという願いによるものだった³⁷。彼女にとっては、相手の持つ長所（教養）を自分ももつことが、二人の関係を良好にするために重要であると思われたのだ。したがってこの引用箇所は、アルベルチーナの話し方そのものへの語り手の評価でもあるが、相互の力関係に関する二人の思惑の違いをも同時に表現しているのである。

4. 建築物のアイスクリーム：知性と趣味の象徴

ここまでは、主にコンテキストや語り手の反応の考察を通じて、アイスクリームへの賛辞がアルベルチーナの成長の結果であることを確認してきた。これ以降は、主にアルベルチーナの心理に焦点を当てながら、テキストの詳細な分析に移りたい。

まず、この挿話の直前に位置する「パリの物売りの呼び声」のテキストとアイスクリームのテキストとの関係について考えてみよう。

「あら！」とアルベルチーナは叫んだ。「キャベツ、にんじん、オレンジですって。私の食べたいものばかり。[...] それから、こうしたものを全部一緒に食べるのはどんなに楽しいでしょう。私たちの聞くこのすべての呼び声がおいしい食事になるのよ。」 [...] 「でも夕食には私たちが呼び声を聞いたものしかもう絶対に欲しくないわ。」 [...] 「ねえ、私は呼び声を聞いたものしかもう欲しくないと言ったけれど、でも当然例外はあるわ。だからルバツテに立ち寄って私たち二人のためにアイスクリームを注文するのは私全然構わないのよ。まだ季節じゃないってあなたは言うでしょうけど、私は食べてみたいの！」 [...] 「いずれにせよ、アイスクリームは通りで名を呼ばれたり売られたりしているものではないのに、なぜそれが欲しいの？」 [...] 「私がこういう呼び売りされる食べ物で好きなのは、吟唱叙事詩として耳で聞いたものが、テーブルで性質を変えて私の口に運ばれる (change de nature à table et s'adresse à mon palais) っていうことなの。アイスクリームについていえば（私は、あなたが私のために、古めかしい型に取ったものだけを注文してほしいのですから）、寺院、教会、記念碑、岩山、そういったものを食べるときはいつでも、私がまず見るのは絵入り地図のようなもので、それから私はそのフランボワーズやヴァニラの建築物を、私の喉の中で冷たさに変えて (convertis) しまうの」³⁸

「呼び声を聞いたものしか食べたくない」とアルベルチーナは言うが、アイスクリームはその例外として、つまり物売りに名を呼ばれず通りでは売られていない食べ物の一つ

として言及される。では、名を呼ばれる食べ物とアイスクリームの違いは何だろうか。アルベルチヌにとって前者の楽しみとは、耳で聞いた言葉がひとりでに変化し自分の口に食べ物として差し出されるということである。後者の魅力とは、様々な建築物の形をしたアイスクリームを自分自身の喉の中で溶かすことである。ここでは、聞くことと言うこと、変化することと変化させることが対比されている。聞くこと、変化したものを食べることは受動的な行為であるのに対し、話すこと、変化させることは能動的な行為である。したがって物売りの声からアイスクリームの話し言葉への移行は、アルベルチヌの態度が受動性から能動性へ移行することを意味しているのだ。また、少し先で引用する「私の舌は／私は唇で [...] する役目を持っている」(ma langue se charge de [...]; je me charge avec mes lèvres de [...]) という表現もアルベルチヌの能動性を表しており、彼女の「自律的な」進歩というコンテキストと一致しているといえる。

次に、問題のテキストで使われている比喻に目を向けてみよう。語り手が述べるように、彼女の話し言葉は非常に文語的な比喻 (images si écrites) に満ちており、それはアイスクリームを建築物や山に喩えるというものである。

どうしましょう、リッツ・ホテルであなたはチョコレートかフランボワーズのアイスクリームでできたヴァンドーム広場の柱を見つけるんじゃないかしら、そして、そういったものが冷たさを称えるために (à la gloire de la Fraîcheur) 通路に立ち並んでいる奉納柱か柱塔のように見えるためには、その柱が幾つも必要ね³⁹。

ここで冷たさ (Fraîcheur) という語が大文字になっていることに注目しよう。興味深いことに、この断章の最初のバージョンとみなされている以下のテキストにおいては、「冷たさ」ではなく「味覚の寺院」(“Temple de Goût”) という言葉が、括弧の中に大文字で記されている。

[C'était] le jour où les Verdurin recevaient et depuis que Swann leur avait appris que c'était la meilleure maison, c'est chez Rebattet qu'ils commandaient leurs petits fours. « Je ne fais aucune objection à une glace, mon Albertine chérie, mais laissez-moi la commander moi-même, ou chez Rebattet, ou chez Poiré-Blanche, ou au Ritz, je verrai. » « Vous sortez donc? » me demanda Albertine de l'air inquiet de quelqu'un dont on déjoue les projets. « Je n'en sais rien. » « Enfin en tous cas si vous commandez une glace, je vous en prie qu'on la fasse prendre dans un de ces vieux moules démodés où elles ont l'air d'églises ou de temples aux colonnes de framboise comme sont paraît-il certains monuments de Venise. Ah ! Venise ! Je tiens à ces moules parce que c'est comme les choses criées. Au lieu d'un refrain c'est une architecture qu'on convertit en fraîcheur pour le gosier. Aussi chacun de ces

temples-là destinés à fondre dans ma bouche, je l'appelle le “Temple de Goût”. (私はそれを「味覚の寺院」と呼ぶわ。) Au Ritz je ne crois pas qu'ils aient plus compliqué qu'une [sic] obélisque ou une colonne. Mais ces colonnes Vendôme-là je me charge de les amincir cuillerée par cuillerée, jusqu'à ce que le monument tout entier ait passé de la place Vendôme où est le Ritz, jusqu'au fond de ma gorge. Adieu chéri. »⁴⁰

このテキストはブルーストの手により全文が線で引かれて消されている。とはいえ、大文字で記されているのが他にもない「味覚の寺院」であることには意味があると考えられる。というのも味覚 (Goût) という語は単にアイスクリームの味を指すだけではなく、ヴェネチアの建造物のよう (comme sont paraît-il certains monuments de Venise) と形容されるアイスクリームの、想像上の洗練された形態を指す「趣味」「好み」という意味にも取ることができるからだ。また、決定稿におけるアルベルチーナの言葉全体は、教会、ヴェネチア、エルスチール、日本の盆栽、ヴァントゥイユ嬢について言及しており、こうした主題をイールズは自己パステイッシュというメタテキスト的観点から『失われた時』の縮小版 (mini-Recherche) だと指摘している⁴¹のだが、あくまで物語の内側に留まって解釈するならば、こうしたテーマ群はすべて建築、都市、絵画、音楽における「語り手の好み」を表わしているといえるのである。(ちなみに菓子店もアルベルチーナが最初に提案したルバツテではなく、語り手の選んだリッツに変更されている。)

また、大文字で記されている「冷たさ」 (Fraîcheur) については、これを「知性」(とりわけ語り手の) と読み替えることができる。なぜなら『囚われの女』には、アルベルチーナが冷たさと語り手の知性とを同一視している次のような箇所が存在するからだ。

私の部屋に入るやいなや、彼女は寝台の上に跳び乗って、時折私のような種類の知性を定義し (définissait mon genre d'intelligence)、本心から熱狂しながら、私と別れるくらいなら死んだほうがましだと誓うのだった。こういうことがあるのは、私が彼女を来させる前に髭を剃っていた日である。彼女は自分が感じたことの原因をはっきりさせることができないような女たちの一人だった。ひんやりとした肌によってもたらされる喜び (le plaisir que leur cause un teint frais) を、彼女たちは相手の精神的長所によって説明するのであり、相手が自分の未来に幸福をもたらすように思えるのだが、その幸福は髭が伸びるにつれて減少しそれほど必要ではなくなるのだ⁴²。

勿論、語り手の考察は、剃りたての肌のひんやりとした感触と相手の知性との混同が誤りだということに向けられている。しかしこの誤りはそもそも、冷たさと語り手の知性という異なるものが、アルベルチーナに同一の感覚をもたらすということに由来する

のである。したがって、アイスクリームの冷たさについて語るアルベルチーナは、語り手の知性について語っているのだと考えることができる。

以上のように、菓子や形の好み、趣味を表しており、アイスクリームの温度は語り手の知性を表していると解釈しうるのである。

この解釈をより確実なものとするために、アイスクリームを食べるという行為がどのように描かれているかについてもさらに検討してみよう。

リッツではフランボワーズの記念碑も作っていて、それらの記念碑は私の喉の渇きの焼けつく砂漠のなかで (*dans le desert brûlant de ma soif*) あちこちに直立してオアシスよりももっと私の喉の渇きを癒してくれる (*ils désaltéreront mieux que des oasis*) のだけれど、私はその薔薇色の花崗岩を喉の奥で溶かすでしょう (*je ferai fondre le granit rose au fond de ma gorge*)⁴³。

アイスクリームは、とりわけその冷たさによって喉の渇いたアルベルチーナに欲望されており、彼女の渴望の強さは焼けつく砂漠 (*le desert brûlant*) と表現されている。ここでは、冷たい固形物であるアイスクリームとそれを溶かそうとする熱をもった喉との接触が強調されている。

アイスクリームは大きくなくてもいいの、半分だって構わないわ、こうしたレモン色のアイスクリームはそれでもやっぱりとても小さなサイズに縮小された山よ、でも想像力でその大きさを復元できるわ、[...] そんな小さなアイスクリームを幾つか、私の部屋の中で、小さな流れに沿って配置すると、大河に向かって下ってゆく巨大な森、小さな子供が迷子になってしまうような巨大な森を、私は持つことになるでしょうね。同じように、黄色っぽい色でレモン味をした私の半分サイズのアイスクリームの足下に、私には御者や旅行者、馱馬車がとてもよく見えるわ、私の舌はそれらを飲み込んでしまうような冷たい雪崩 (*glaciales avalanches qui les engloutiront*) を起こさせる役目を持っているの。[...] 私の唇は、これらのイチゴ味の斑岩でできたヴェネチアの教会を、柱をひとつひとつ破壊してしまい、取っておいたものを信者たちの上に落っことす役目をもっているの。[...] ええ、これらすべての建造物は石でできた広場から、その溶けつつある冷たさが既に脈打っている私の胸のなかへ移動するでしょうね (*passeront de leur place de pierre dans ma poitrine où leur fraîcheur fondante palpite déjà*)⁴⁴。

初めは建築物に喩えられたアイスクリームは、ここでは模型のような小さな山に見立てられている。注目すべきは、アイスクリームのサイズとアルベルチーナの「部屋」の

大ききの違いであろう。小さなアイスクリームは、想像上の彼女の部屋の中にすっぽりと収まっており、その一部となって包含されている。また、喋りながら部屋の中に山や河、森、子供を配置していく様は、想像の中で箱庭を作っているかのようで、箱庭作りにある遊びの要素と、比喩を使うことの言葉遊びとしての遊戯性が、ここでは重なり合っているようでもある。それゆえ時折彼女があげる笑い声は、嫉妬深い語り手の耳には残酷な官能を帯びて聞こえたとしても、単にこうした遊びの楽しさから来る笑い声ともいえるのである。

雪崩を起こさせる、破壊する、落っこす、といった表現に見られる攻撃性は、このテキストに口唇性のセクシャリティの表出を見る研究において、アルベルチヌのサディズムとして論じられている⁴⁵。確かに対象の所有、対象との融合への欲望は、概して性的な意味に解されうる。しかしアイスクリームへの欲望とは語り手のもつ知性と教養への欲望を意味すると解すれば、このような攻撃性はこうした欲望の貪欲さに付随するものと考えられるのである。壊されたアイスクリームの建物は、最終的にはすべて「私」の胸の中に移動するのだが、その胸の中では既に冷たさが息づいている。アイスクリームのもつ冷たさはこうしてアルベルチヌの中へと移動し、彼女のものとなる。上に引用したテキストにおいて、アイスクリーム＝欲望の対象の獲得は、対象との接触（喉の中で）、対象の包含（部屋の中で）、対象の外部から内部への移動（胸の中へ）という経過を辿って行われている。

だが、これらアイスクリーム製の建物は、そもそもアルベルチヌの喉の中で冷たさに変化させられたのではなかつただろうか。既に一度引用したが、彼女は「私がまず見るのは絵入り地図のようなもので、それからその地図のフランボワーズやヴァニラの建築物を、私は私の喉の中で冷たさに変えてしまうの（*je convertis ensuite les monuments de framboise ou de vanille en fraîcheur dans mon gosier*）」と言っていた。知性と趣味の獲得を語る言葉は、すでにそれらを獲得しているアルベルチヌが比喩を作ることにより始動したのである。ここに『失われた時』のもつ円環構造（作品の成立過程それ自体を語る作品）と同一の構造が見られるということも付け加えておこう。

以上のことから、次のように結論することができる。アイスクリームのテキストにおいてアルベルチヌが称える冷たさ（*Fraîcheur*）とは語り手の知性の象徴であり⁴⁶、アイスクリームの取る様々な外観（形、色）とは、語り手の趣味を反映している。したがって建築物の形をしたアイスクリームを食べることは、語り手の知性と趣味を自分の中に取り込むことを意味している。このような解釈は「バルベック以来どれほどの知性と隠れた趣味がアルベルチヌの中で急に発達したかを示すものであった」という語り手の述懐や、彼女の言葉が語り手の影響を受けたものである、という記述とも正確に対応するのである。

最後に、象徴としてのアイスクリームを食べるという空想と、精神分析における「体

内化 (incorporation)」「取り入れ (introjection)」という心的機制との関わりについて指摘しておきたい。

体内化も取り入れも、主体が対象のもつ性質を外界から内界へと移動させることを指す語であり、いずれも同一化や内在化というより広い心的活動の一形態である。体内化は具体的、身体的な思考水準で働き、主体と対象との間の身体的境界に関わるものである。他方、取り入れは体内化よりも広い意味で使われ、象徴的な思考水準も含むとされている⁴⁷。フロイトは『欲動と欲動運命』のなかで「自我は差し出された対象を、それらが快の源泉である限り自分の自我の中に受け入れる。すなわち、[...] これらを取り込み、他方では、内部で不快を引き起こすものは、自分の中から押し出してしまう⁴⁸。」と述べており、取り込まれる(取り入れられる)対象とは、自我に快を与えるものである。

われわれはアルベルチーナの話し言葉のなかに、彼女が主人公の性質(知性や趣味)を獲得する過程が描かれていると解釈した。対象＝主人公の性質は、彼女の空想のなかでアイスクリームという食べ物の形や色、温度により象徴されている。対象の性質の取り入れは、「食べる」という身体的行為によって表現されており、唇、舌、喉、胸といった主体の身体部位がアイスクリームという対象との境界として描かれている。それと同時に、彼女の身体は砂漠、部屋といった空間的象徴によっても表現されている。アルベルチーナが語る内容はしたがって身体的・具象的な水準と象徴的な水準との両方を含んでおり、どちらかといえば取り入れという言葉で言い表される。

もちろん、ここで殊更取り入れという考えを持ち出すことは、精神分析的な知見の正しさを示す一例が『失われた時』に描かれていると主張するためではない。アイスクリームのテキストでは、作家とほぼ同一人物である語り手がアルベルチーナへ与えた影響が強調され、発話者であるアルベルチーナ自身の内面については明確にされていない。それゆえ多くの論者はアルベルチーナがアイスクリーム礼賛の話し手であるという物語上の事実を等閑視し、彼女の言葉を直ちにプルーストの自己反省的な創作とみなしたのではないか。彼女の言葉遣いの変化したのは語り手の性質の取り入れによってであり、彼女の空想それ自体も取り入れという心的事実を表していると言うことによって、アルベルチーナの言葉を洗練させた内的な変化がどのようなものであったかをより明確にすることができるのである。

『失われた時』において、他者の心理とはおおむね到達不可能なものである。とりわけアルベルチーナの心理は語り手の主観を通して不透明に描かれており、彼女の内面は主人公にも読者にも不可知なものとして与えられる。語り手の猜疑心の中で彼女の言葉は容易に嘘に反転しうる。しかしアイスクリームの語りは、語り手に嫉妬心を引き起こしはするが、それが嘘か否かは問題とならない。なぜなら、その内容よりも隠喩という表現形式によって、彼女が語り手の性質を取り入れたことが示されるからである。作家はこの短い一節の中で、取り入れという心の働きの表面化によって、通常は不可知である

他者の心情が例外的に伝達されることを描いているのである。

5. 結び

アルベルチヌがアイスクリームを称えるために用いた華麗な表現は、「アルベルチヌによる語り手の模倣」という物語上は不可能な事態や、作家による自己パスティッシュというメタテクスト的な試みを表しているというよりも、むしろアルベルチヌへの語り手の影響、アルベルチヌの自律的な進歩の結果として理解される。別れの予感と感動という語り手の二つの相反する反応も、この点から説明されうるものである。また、アイスクリームのテキスト自体も主人公の影響をアルベルチヌの側から語っている。建物の形をしたアイスクリームは語り手の知性と趣味を表しており、それを食べるということは語り手の性質の取り入れ (introjection) を意味しているのである。

『失われた時』には、アイスクリームのテキスト以外にも、取り入れやこれに類する機制である同一化 (identification) を描く挿話が存在する。例えば、サン＝ルーは語り手に、主人公の母は祖母に、ジルベルトはラシェルに、それぞれ別の理由により別な仕方で類似する様が語られている。また、取り入れの対概念である投影 (projection) (主体が自らの感情を外の対象の内に見出すこと) に関していうと、これは恐らくプルースト的愛の主要な特徴である嫉妬やゴモラの世界の記述に深く関わるものである。『失われた時』における精緻な心理描写とその表現を総合的に理解するために、本稿で論じる機会がなかった同一化、投影といった心の働きについても順次考察してゆく必要があるだろう。

註

¹ Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu* (en abrégé : RTP), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989, t.III, p.636.

² Philippe Lejeune, « Écriture et sexualité » in *Europe*, février-mars 1971, p.113-143 ; Jean-Pierre Richard, *Proust et le monde sensible*, Seuil, 1974, p.19-28 ; Emily Eells, « Proust à sa manière » in *Littérature*, N°46, mai 1982, p.105-123 ; Jean Milly, « Cris de Paris et désir des glaces dans *La Prisonnière* » in *Proust dans le texte et l'avant-texte*, Flammarion, 1985, p.135-156 ; 川中子弘、『プルースト的エクリチュール』、早稲田大学出版部、2003年、p.151-164 ; 原田武、『プルースト 感覚の織りなす世界』、青山社、2006年、p.173-176.

³ Harold March, *The two worlds of Marcel Proust*, University of Pennsylvania Press, 1948, p.236 ; Gerard Genette, *Palimpsestes*, Seuil, 1982, p.136-138. ルジュンヌ、リシャール、イーブルズ、ミイも同様の見解を表明している。これ以外の論点としては、主にフローベールとの影響関係を扱ったものとして、Elisabeth C. Arlyck, « Pièce montée et sorbets : Flaubert et Proust » in *French Forum*, N° 3, 1978, p.56-64 ; Mireille Naturel, *Proust et Flaubert : Un secret d'écriture*, Rodopi, 1999, p.387-398 が挙げられる。また、Nathalie Mauriac Dyer, *Proust inachevé : Le dossier « Albertine disparue »*,

Honoré Champion, 2005, p.165-167 では、スワンの死の考察におけるアイスクリームの型 (moules) への言及や「ヴェネチアの教会の破壊」というモチーフについて補足されている。

⁴ RTP, t.III, p.636. (傍線引用者)

⁵ RTP, t.IV, p.148.

⁶ Gerard Genette, *op.cit.*, p.136.

⁷ Emily Eells, *op.cit.*, p.114-115.

⁸ *Op.cit.*, p.123.

⁹ Jean Milly, *op.cit.*, p.145-146.

¹⁰ Michihiko Suzuki, « Le “Je” Proustien » in *Bulletin de la Société des amis de Marcel Proust (en abrégé : BMP)*, N°9, Société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray, 1959, p.69-82.

¹¹ Serge Gaubert, « La conversation et l'écriture » in *Europe*, août-septembre 1970, p.185.

¹² Jean Milly, *op.cit.* : 川中子弘、前掲書。

¹³ Emily Eells, *op.cit.*, p.105-107.

¹⁴ RTP, t.III, p.527.

¹⁵ RTP, t.III, p.528.

¹⁶ RTP, t.III, p.572.

¹⁷ RTP, t.III, p.672-673.

¹⁸ RTP, t.III, p.825, 877-883.

¹⁹ RTP, t.III, p.844, 861.

²⁰ RTP, t.III, p.541, 571-572.

²¹ RTP, t.III, p.576.

²² RTP, t.III, p.870-871.

²³ RTP, t.III, p.583.

²⁴ RTP, t.IV, p.51.

²⁵ RTP, t.IV, p.1059.

²⁶ イールズはアイスクリームの描写が一種の物語内の括弧 (parenthèse dans le récit) であり、語りの他の部分から切り離されていると述べている (Emily Eells, *op.cit.*, p.118)。しかし当該のテキストはアルベルチヌの成長という文脈の中に位置し、「二重の黄昏」という表現の伏線となっているとわれわれは考える。

²⁷ Nathalie Mauriac Dyer, « "Sur une enveloppe souillée de tisane", un plan pour la suite d'*Albertine disparue* », in *BMP*, N°42, 1992, p.19-25. 作家が1922年11月の死の直前まで取り組んでいたモチーフは「フィガロの記事」と「スワン家とゲルマント家との縁組」であり、アイスクリームの断章は1922年夏から秋にかけて『囚われの女』の最後のタイプ原稿に加筆されたという。

²⁸ 山崎俊明、『「失われた時を求めて」における「ル・フィガロ」掲載記事(1) : 『「ゴンクール未発表日記」の模作』とのかかわりにおいて』、文学部紀要、第8号、文教大学文学部、1994

年 12 月、p.210-240.

²⁹ RTP, t.III, p.636.

³⁰ Emily Eells, *op.cit.*, p.108, 115.

³¹ Jean Milly, *op.cit.*, p.146-148.

³² RTP, t.III, p.662. (傍線引用者)

³³ RTP, t.III, p.670. (傍線引用者)

³⁴ RTP, t.IV, p.51.

³⁵ RTP, t.III, p.636. (傍線引用者)

³⁶ Gerard Genette, *op.cit.*, p.137.

³⁷ RTP, t.III, p.593.

³⁸ RTP, t.III, p.634-636. (傍線引用者)

³⁹ RTP, t.III, p.636. (傍線引用者)

⁴⁰ N. A Fr 16746, p.11, cité par Jean Milly, *op.cit.*, p.141-142. (傍線引用者) この最初のヴァージョンとは『囚われの女』第3のタイプ原稿へのプルースト自身の手による加筆部分である。

⁴¹ Emily Eells, *op.cit.*, p.117.

⁴² RTP, t.III, p.529. (傍線引用者)

⁴³ RTP, t.III, p.636.

⁴⁴ RTP, t.III, p.637.

⁴⁵ 例えばルジュンヌはアルベルチヌを一種の淫蕩で加虐的な食人鬼 (*une sorte d'ogresse sensuelle et sadique*) と呼び、アイスクリームを舐めたり吸ったりすることの性的な色合いを強調している。(Lejeune, *op.cit.*, p.135)

⁴⁶ 川中子弘は、主人公が寒がりであることや主人公の足を母親が温めるという数々の挿話を根拠に、「主人公の身体＝アイスクリーム」と解釈している(前掲書、p.161)が、本稿ではむしろ「主人公の属性(知性、趣味)＝建物の形をしたアイスクリーム」と考える。

⁴⁷ « Introjection », « Incorporation », « Identification » in *Vocabulaire de la psychanalyse*, Jean Laplanche et J.B. Pontalis, publié sous la direction de Daniel Lagache, PUF, 1978 ; 『精神分析事典』、小此木啓吾編、岩崎学術出版社、2002年。二つの事典の「取り入れ」「体内化」「同一化」の項を参照した。「introjection」は摂取、取り込みとも訳されるがここでは取り入れと訳出した。

⁴⁸ ジークムント・フロイト、「欲動と欲動運命」、『フロイト全集14』、新宮一成訳、岩波書店、2010年、p.188.

